

トウモロコシを収穫



全農からの駐在員は現在4名。新型コロナウイルスの世界的感染拡大により、各国政府が封鎖措置を余儀なくされた。国際物流においてはコスト上昇や遅延が大きな問題になる中、穀物の安定供給のため業務にあたっている

全農グレイン株式会社

米国での集荷基盤を強化

穀物輸出基地で一貫サプライチェーンを担う

J A全農グループでは、米国の全農グレイン株式会社にて、穀物の集荷から輸出まで一貫したサプライチェーンを構築しています。米国における穀物輸出の状況とトウモロコシの需給推移について、同社からのレポートをお届けします。

コロナ禍での穀物輸出の状況

全農グレイン株式会社では設立以来、内陸集荷基盤強化や保有する輸出エレベーターの増強も図られ、強固な集荷・輸送・輸出の一貫サプライチェーンの構築を実現しています。

米国では新型コロナウイルスの感染者数が増加しているものの、穀物輸出は必要不可欠なビジネス(Essential Business)と位置づけられ、同社の船積みエレベーターは土日も含めて24時間稼働を続けています。日本への穀物の安定供給を行うため、現場スタッフ一同、感染にも最大限の注意を払って業務にあたっています。新型コロナウイルスの影響は予断を許さない状況ですが、J A全農グループの一員として、今後も穀物の安定供給に取り組んでいきます。

米国産トウモロコシの需給推移と産地情勢

現在、米国では2020/2021年産トウモロコシの収穫が終盤に差しかかっています。夏から秋にかけて一部地域で乾燥が見られたものの、概ね作柄は良好と見られています。今回は米国トウモロコシ需給構造の変遷についてご説明いたします。

米国のトウモロコシの生産量は年々増加傾向にあります。図1は過去30年の米国トウモロコシの単収の推移です。2020/2021年度には、単収は178.5ブッシェル(1エーカーあたり)にまで増加する見通しです(9月11日現在)。過去30年間で約65%単収が増加した事になります。主な要因として、種子・農機・肥料の改良などが挙げられます。

図1. 米国産トウモロコシ単収の推移

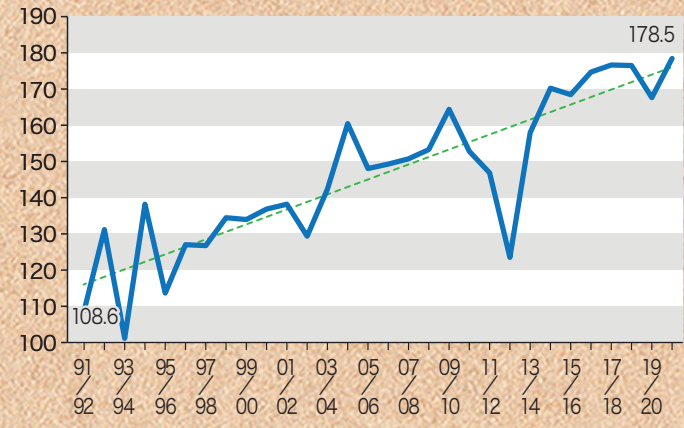


図2. 米国産トウモロコシ需給

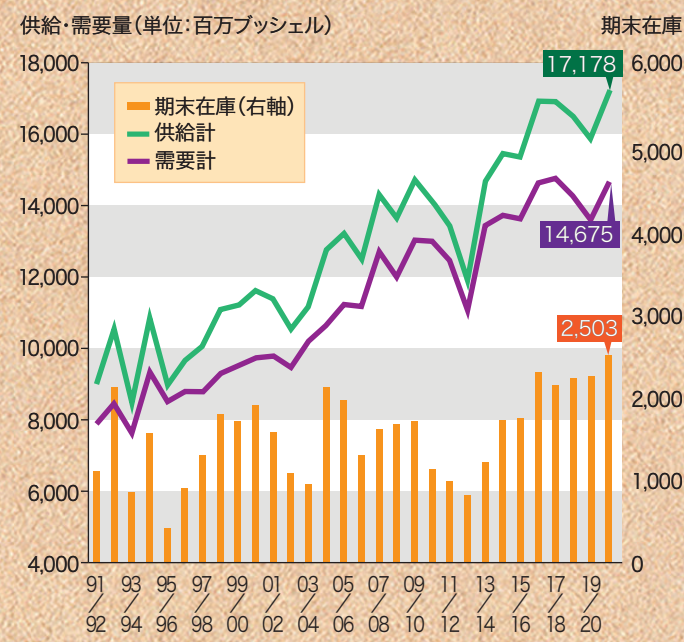
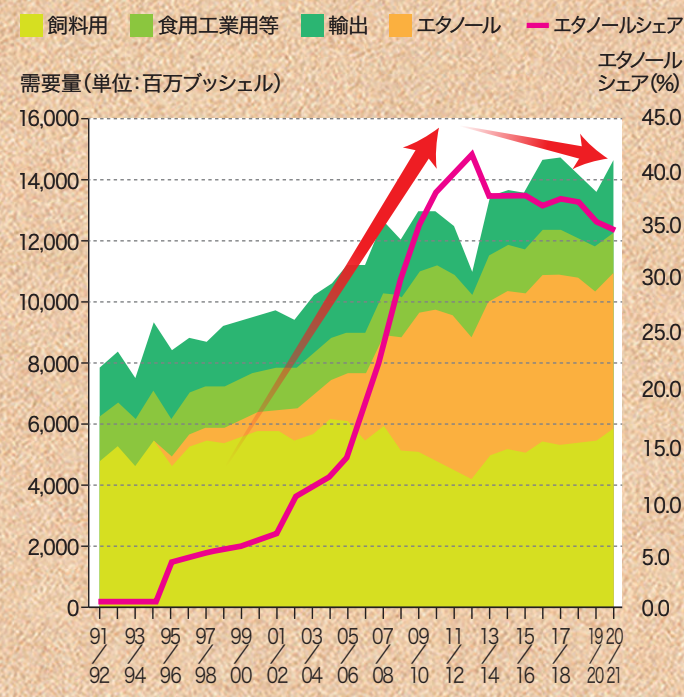


図3. 米国産トウモロコシ需要の推移



なかでも種子開発の進歩は著しく、従来型の交配に加え、1990年代後半以降には遺伝子組み換え技術が導入され、除草剤耐性、害虫抵抗性などの特性を持つ種子が栽培されています。また、農機の大規模化や自動化も進み、作付けや収穫の効率性が向上しています。特に作付け機械の大規模化や自動化により、最適な時期での作付けが可能となり、単収増に寄与していると考えられています。

単収の増加にともない、供給量は増加傾向にありますが(図2)、同様に需要も堅調です。特に2000年代以降に著しい伸びを見せているのが、エタノール需要です(図3)。

米国では石油の輸入依存からの脱却、気候変動

への懸念、また地域経済の活性化を図る等の目的から、00年代以降、自国でのエタノール生産が飛躍的に増加しました。主に米国のエタノールはトウモロコシ由来で製造されており、現在では米国トウモロコシ需要の約35%がエタノール向けで占められています。

ただし、エタノール向け需要はここ数年頭打ちとなっています。米国で販売される自動車は、ガソリンにエタノールを10%まで混合しても安全性に問題がない事が保証されており、この保証に基づき、米国で販売されるガソリンのほとんどは一部にエタノールが混合されています。この「10%まで混合」というのが事実上のエタノール使用量の天

井となっています。

また、20年には新型コロナウイルスの影響で経済活動が制限され、ガソリン需要も後退しました。現在では徐々に回復を見せていますが、いまだ新型コロナウイルス前の水準には戻っていません。ガソリン消費量が伸び悩む中、今後は10%以上の混合が推し進められるかが注目されています。

20~21年産の生産量は収穫が終わると確定しますが、近年輸入量が増加傾向にある中国の動向や混迷を極める米中貿易問題、米国のエタノール政策など、引き続き需要動向に注視する必要があります。